

国語

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

亡くなった母のコートから、仕上がり予定日が半年以上前を示したクリーニング屋の預かり証が出てきた。「ネクタイ」と印字されている。佐知子は、預かり証を持って商店街の中ほどにあるクリーニング屋を訪れた。左腕の先がない店主が現れた。

柱時計がひとつ鳴った。店主が戻ってきた。右手に大きな籐とうのバスケットを持っているが、ネクタイはない。

「ごめんねえ、どうしても見つからなくて」

ア 彼は言った。「もうちょっと時間もらえれば、出てくると思うから」

そして、店主はバスケットをレジ台に置いた。それから佐知子を見て、どうぞ、という目をした。佐知子も彼を見返し、ん？という疑問の視線を投げ返した。沈黙のやりとりが五秒ぐらい続いた。

「そうか、路子さんから聞いてないのか」

店主はトクシン①した声を出した。「犬を預かってたんだよ」

「犬？」

佐知子はバスケットの中を覗のぞき込んだ。空っぽだった。スヌーピーのイラストのブランケットが敷かれていたが、たぶん、そのことではないだろう。

「心のきれいな人じゃないと見えない犬」

店主はそう言い、佐知子が顔を上げる前に、がははと笑い飛ばした。「いやいや、冗談冗談。なんか、想像とか、架空とか、そ

ういう犬なんだって。ダイエツトになるとか」

想像の犬。

母の声がよみがえり、消え、佐知子は開きかけた口を閉じた。行き止まりの迷路の壁は建付けが悪くて、スキマから^②Aと記憶の出来損ないが流れ出していたが、佐知子は無理に蓋をした。ほらほら、ネットにも載ってるんだよ、と店主は携帯を見せてきた。確かに「架空の犬を飼ってみる」と書かれた記事が表示されている。健康のために歩こうと思ってもなかなかできないですね。そこで架空の犬を飼って散歩するのです。時間を決めて朝夕。リードを持ってもいいですし、名前を決めてあげるのも効率がいいですよ。いかがでしたでしょうか？

「路子さんはけっこうスタイルよかったから、余計そういうの気にしたんじゃないかねえ」Bとした調子で店主は言った。「オレなんか腹も出てるし、数値も高いしだけど、そういうの始める気にならないから」

「あの」世間話が始まりそうなところを、佐知子はサエギった。^③「それで、預かったというのは、この籠ですか」

「うん、まあ」

店主はイ^{うなず}頷いた。「ネクタイ預けるときに、一緒に持ってきたんだ。架空の犬の話をして、預かってくれないかって」

「籠を？」

「いや、犬を」

「犬を」

「想像のね、目に見えない」先のない左腕を上げ、彼は空中に何かを描いた。犬。たぶん。話の流れから。「こう、ほら、だんだん見えてこない？」

「いえ」

佐知子が言うと、「だよねえ」と店主は苦笑いした。

「ついに路子さん、頭の方が先にダメになっちゃったのかと思ったんだけどさ、本人はしごく真面目なもんだから、断りづらくっ

て」

まあでも肩の荷が降りたよ、と言いながら、店主は右手でバスケットをずいと差し出した。佐知子は受けとり、これといった重みもないそれを、二、三度確かめるように揺らした。

「ありがとうございました」

いったい具体的ななにに礼を述べればいいのかわからなかったが、佐知子はとりあえず頭を下げた。店主は「いいっていいって」と、満更でもなさそうな表情をした。「ちょっと座って待っててよ。ネクタイ、もう少し探してくるから」と言うのと、また奥へと引っ込んだ。

佐知子は再び、あたりの観察を始めた。入ってくるときは気づかなかったが、外の看板の横に、皿が二つ置いてあった。プラスチック、ステンレス。緑と銀。ひとつはドッグフード、もうひとつは水。どちらもまだ新しく、皿の水は、やわらかい風にさざ波立っていた。佐知子はしばらく、その波紋を眺めた。左手で握るバスケットは、まだ軽い。

「架空の犬」

佐知子はそう声に出してみた。狭い店内で、それは思ったよりも響かない。

佐知子の母が架空の犬を飼うのは初めてではなかった。それは大きな地震があり、地下鉄でテロが起こり、佐知子の兄が死んだ年だった。終末のような一年だった。

(中略)

「お持たせしちゃって」

店主が大きな声で戻ってきた。手には透明なビニールで包まれたネクタイがある。臙脂色。それを受け取りながら、これは誰のものなのか佐知子は考えた。順当に考えれば父のものだ。母の筆筒には、まだ父のものが大量に残っていた。だが、彼女の記憶の中で、あまりこういった色のネクタイを締めている父を思い出すことはできなかった。

「意外に多いんだよね、クリーニングの受けとり忘れって」言い訳のつもりはないのだろうか、言い訳のように店主は言った。「あ

んまり多いから、こっちも半年とか過ぎると捨てちゃうんだよ。残ってたのが、運がいいよ」

そうなんですね、と頷く佐知子に、店主はああそうだ、と思い出したように付け加えた。

「そのバスケットは返さなきゃいけないんだって」

「返す?」

店主によれば、バスケットは、〈架空の犬〉のダイエットプログラムを提供する団体のもので、母はそこと契約していたらしい。バスケットはそのプログラムのレンタル品ということだった。

「郵送でも返せるみたいだけど、でっかいし、いつもだったら公民館に係の人がいるよ」

場所わかる? という質問に佐知子が首を振ると、店主は右手でチラシの裏に地図を描こうとしてくれた。ふらふら舞いそうになる紙を、佐知子は押さえた。悪いね、と彼はボールペンで象形文字のような図を描いた。彼の描いた道の通りに歩いたら、どこか帰り方のわからないところまで連れていかれそうな地図だった。それでも佐知子は、公園の中にあるよ、という店主の言葉に納得することにした。ありがとうございます、ともう一度頭を下げ、店を出た。日差しはあるが、風の涼やかな日だった。右手のネクタイを見て、手提げの袋をもらえばよかったな、と佐知子は思った。臍脂のしつぽを C させながら、佐知子は公園を目指し、商店街を南に下った。

歩いていると、「路子さん?」とよく声をかけられた。どうやら母は、この商店街を散歩コースにしていたようだった。籐のバスケットは特徴的だし、そもそもこんな大きなものを買う物かごのようにぶら下げて歩く人は目立つだろう。彼らは母だと思って声をかけ、佐知子の顔を見ると戸惑ったような笑みを浮かべた。佐知子が「路子さん」の娘であることを明かすと エ 納得した声を出し、そして決まって「犬は元気か」と、バスケットを覗きこんだ。

「犬がいたんですか?」

佐知子が訊ねると、みな一様にきまりが悪そうな顔をした。肉屋のおじさんは「目に見えない犬って聞いたよ」と頭をかき、花屋の若い奥さんは「お母様もちやんとわかっておられましたよ」と弁護し、八百屋のおじいさんは「まあ、しっかりした人だった

から」と、やたらと大きな声で答えた。荒物屋のおかみさんだけは、「そんなこと言うなんてあなたは薄情だ」と怒った調子で佐知子に言った。みな母のことをよく知り、母のために口にして言言葉のように思えた。^⑥佐知子は母との距離を自分が測らされていると感じた。空間と時間。

その公園は、佐知子が子供だった時分は、とにかくだっ広い広場に、不釣り合いに小さいすべり台がぼつんと置かれているようなところだった。当時、佐知子も含めた小学生は誰もその、「公園」という定義の言い訳のように置かれた遊具では遊ばず、草がぼうぼうに生えた果てのない空間を縦横無尽に駆け回った。

久しぶりに訪れると、公園は大幅に^⑦変貌^⑦していて、巨大なすべり台のついたウッドハウスのアスレチックを中央に据え、周囲には高齢者向けの健康器具の設備も整っていた。ジョギングコースは赤茶けた柔らかい素材で、トレーニングウェアを着た老若男女が歩いたり走ったりしていた。彼らは汗をかきながらも表情は柔らかく、すれ違うときには軽く会釈をしあったりしていた。^⑧オー・ヘンリーの登場人物たちみたいだと、佐知子は昔読んだ絵本を思い出した。

大きなブナの木があったところには、ドッグランが整備されていた。歩き疲れた佐知子は、そのドッグランの前のベンチに座り、小ささまざまな犬がボールを拾ったり、ただ走り回ったり、Dと転がったりする様子を眺めた。犬は犬で、佐知子のよく知っているものだった。耳と、鼻と、目と、口と、舌と。

「あんたがいなければねえ」

ときどき、母はそう言った。悪意のかけらもない言葉で、でこぼこもなく平坦な^⑨手触り^⑨をしていた。犬をこよなく愛した母は、動物のアレルギーをもつ佐知子を決して責めなかった。少なくとも本人は責めるつもりはなかった。犬を散歩させる家族連れがすれ違つと、しばらく目で追いかけて、特に大型犬だった場合はその影が見えなくなるまでずっと立ち止まり、そうしてぼつりと呟くのだった。あんたがいなければねえ。母としては単に事実を述べただけで、それ以上の意味はなかった。確かに、佐知子がいなければ、母は犬を飼っただろうし、その犬が死ねば、しばらく泣いたあとで、また別の犬を迎え入れただろう。でもそうはならなかったし、それは誰のせいでもない。成し得なかった人生について、母は悔いるタイプではなかった。佐知子も母の陰のない^⑩呟き^⑩に、

⑩ 大人のもつ不可逆性の未来のしっぽのようなものを、なんとなくつまえられた気がするだけだった。それは、そういう言葉だった。^⑪佐知子は記憶の蓋を確かめ、立ち上がった。

(坂崎かおる「いぬ」による)

(注) 荒物屋Ⅱ家庭用の雑貨品を売る店。

〔問一〕問七については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問八・問九については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B C Dに入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | ごろごろ | 2 | ぶらぶら | 3 | ふわふわ | 4 | しみじみ |
|---|------|---|------|---|------|---|------|

問二 ☐ アイウエに入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|----------|---|--------------------------|---|---------|
| 1 | 必要以上に | 2 | 申し訳なさそうに | 3 | 鷹揚 <small>おうよう</small> に | 4 | 齒切れ悪そうに |
|---|-------|---|----------|---|--------------------------|---|---------|

問三 傍線④「肩の荷が降りる」のように、「肩」を使った慣用句のうち、**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 肩をたたく
- 2 肩をすくめる
- 3 肩をなでおろす
- 4 肩をすばめる

問四 傍線⑤「これといった重みもないそれ」とあるが、この言葉が意味することの説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 佐知子には店主の言葉が滑稽に聞こえたということ
- 2 佐知子が想像していたよりもバスケットは軽かったということ
- 3 佐知子はバスケットに店主の思いを感じることができなかったということ
- 4 佐知子は架空の犬を感じることができなかったということ

問五 傍線⑥「佐知子は母との距離を自分が測らされていると感じた」とあるが、この一文の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 架空の犬は商店街全体で共有されており、疑っているのは自分だけだということに気がついた。
- 2 架空の犬は商店街全体で共有されており、母は商店街の人たちに愛されていたことに気がついた。
- 3 商店街全体で共有されている架空の犬を自分も受け入れなければいけないと考えた。
- 4 商店街全体で共有されている架空の犬を認めることが母の供養になると考えた。

問六 傍線⑨「オー・ヘンリー」が執筆した作品を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 最後の一片
- 2 青い鳥
- 3 チョコレート工場の秘密
- 4 星の王子さま

問七 傍線⑪「佐知子は記憶の蓋を確かめ」とあるが、この行為の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 架空の犬と分かった上で飼っていた母を十分に受け入れてこなかったことを確認した。
- 2 架空の犬を飼うほど母が混乱していたことに気付いていなかったことを確認した。
- 3 架空の犬を信じる母をいまだに受け入れることができていないことを確認した。
- 4 架空の犬と分かった上で飼っていた母を商店街の人たちが憐れんでいたことを確認した。

問八 傍線⑩「大人のもつ不可逆性の未来」とあるが、これと同じ意味を表している箇所を、本文中から九字で抜き出しなさい。

問九 傍線①②③⑦⑧のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三つの種類の人間がある。先ず他人の私事に妙に関心し、とりわけいわゆる醜聞を、ことに世間に名の知られた他人の醜聞を愛する人間がある。彼等はそういう興味からいわゆる三面記事事件を喜ぶ。このような人間の興味は、今日ことに婦人雑誌などによって巧みに利用されているところである。

第二の種類の人間は特にいわゆる英雄伝や偉人伝を読むことを好むように見える。彼らはとにかく偉い人になりたい、なんでも成功したいという心に燃やされ、教訓的見地からつづられた「実用的歴史」を愛し、あるいは名士の成功談なるものによって感激させられることを欲する。こういう成功主義的または英雄主義的心理も、今日とくに大衆雑誌といわれるものによって巧みに利用されているところである。

しかし第三の種類の人間がある。私はこの種類の人間のひとつの特徴をとらえて、彼等をば日記や自叙伝を読むことを愛する人間ということができないかと思う。彼等は他人の私事の秘密をのぞくことを徒らに好むのではない。けれども彼等は他人の生活に無関心なだけでなく、それを理解することを欲する。しかしそのことは自己を理解せんがためである、いな、人間と生とを理解せんがためである。また彼等は他人のいわゆる成功や英雄的行為によって徒らに感激させられることを喜ぶのではない。むしろ彼等は平凡な人生の複雑微妙、世のつねのすがたの面白さ、深さを理解することを求めるのである。

① いたす
②
というのはこうである。日記や自叙伝は、本来、他人の醜聞を愛する人の趣味に適するものでない、なぜなら人間は自分自身のためにのみ記された日記の中においてさえ容易に自分の秘密を赤裸裸に告白するものではないから。また日記や自叙伝においては、本来、偉大な人々も、彼等の超人間的な行為や事業のすばらしさについて語るよりも、むしろ彼等の人間らしい生活や運命について書くことを好むものであるから、自己誇示というまでもなく、自己暴露ないし自己露出ということも日記や自叙伝においては堅く禁じられている。②
そこにおいてほどりアリズムの要求されるところはないのである。

だが三つの種類の人間があるのでなく、それらはむしろ人間の三つのところを現わすものとも見られよう。A 我々が実際に日記や自叙伝をひもどこうとする気持には、他人の私事の秘密を喜ぶところ、もしくは他人の成功や英雄的行為にあやかろうとするところが混じている。これらのところは媚^こびられることができるであろう。リアリズムの最も要求される日記や自叙伝においてほどまた実際にその困難なところはないからである。

三つの種類の人間あるいは人間の三つのところに相応して文学の三つの現実の形態がある。第一のものには特にいわゆる軟文学が、第二のものにはいわゆる大衆文学が、第三のものには主としていわゆる心理小説が相応するともいわれよう。

日記や自叙伝の要求するのは完全なリアリズムである。その精神は文学的精神でなく科学的精神であるとさえいつてよい。そういつたからとて、我々が例えば日記を書くこととするのは、あらゆる人間に具わっている自己表現の欲求すなわち芸術的欲求のおのずからなる現われでないというのではない。B 素人の文学的表現の好みほど危険なものはない。そういう好みのうちには自己にこび、あまえ、もしくは自己をひけらかすところがひそんでおり、あるいは容易に忍びこむものである。そこに要求されているのは詩的精神でなく、散文的精神であるといつてよい。詩にリアリズムがないというのでない。しかし詩的であろうとするととき、装飾的になったり、センチメンタリズムに陥^{やす}ったりし易いものだ。

かくて日記についていえば、淡々としてただ事件を叙したのに案外面白いものがある。もちろん日記の本来の面白さは事件そのものにあるというよりも、日常サ^④ハンジを述べて筆者の主観などとても現われそうにないところにその主観がおのずからにじみ出ているところにある。したがって上乘の日記は事件の叙述よりも心理の描写に求めらるべきであろう。しかし心理を十分に描いて完全なリアリストであることはまったく容易のことではない。どうしてもあまくなりたがる。C 教訓的、道学者的となり易い。教訓的な実用的歴史は心理主義的であるのがつねである。D 道学者というものはまるであまい物の見方をしていることが多いと思う。日記はカン^⑤ケツなのがふつう面白い。自分を多く語って真実であることは困難であるからである。文豪といえども日記では筆を惜しむのがつねだ。

断片性は日記の最も根本的な性格である。そのことは多くの日記がつれづれに、きれぎれに書かれるということによるのではな

く、かえって日記そのものの最も内的な本質を現わすのである。すなわち日記の断片性は根本的に「生の断片性」にもとづくのである。生の最も内的な規定は断片性である。ここに生というのは特に内的生もしくは「内的人間」のことである。さきに心理といったものは純粹に心理的なものではなく、むしろもつと感性的ともいわれるべき内的人間の意味に解されねばならぬ。外的人間や生活はどれほど断片的に見えてもそのじつ連続的であるに反して、内的人間や生活は深く理解すればするほど断片性をあらわにするように思われる。これ、その面白さが主として、その「人間」の面白さにかかり、その上乘なるものは内的生活の描写にあるといわれる日記の根本的性格が断片性である所以である。^⑥生の断片性を最も明かに現わさせるものは、それ自身生の根本的規定に属するところの死の立場である。したがってすぐれた日記の多くは死の立場から書かれた生の記録である。例えば、^(注1)アミエルの日記は最上の日記のひとつと認められている。ところでトルストイは彼の愛読したこの日記について書いている、彼は、「我々が凡て死を宣告されて、ただその執行を猶予されているだけであることを痛感している。そしてこれこそ、この書が非常に^⑦シンシで、厳粛で、有益なる所以である。」

よき自叙伝はよき日記よりも稀である。^{まれ}ゲーテの『詩と真実』は最上の一つといつてよいであろうが、有名なルソーの懺悔録^{ざんげろく}でさえ^{はなは}甚だすぐれた自叙伝に数えられ得るかはすでに疑問である。これひとつには、自叙伝は他人に読まれることを予想して書かれ、そして他人の前で自己を正直に告白することは困難であるのによるともいわれよう。日記は少くともその本性上は他人に読ませようとするものではない。もつとも日記が全然他人の存在を予想せずして書かれると考えるのは間違いだ。人間の社会性ははるかに深く根差しており、人間は最も内密な行為においても社会的に規定されている。それはとにかく、自叙伝において専ら自己^{もっぱら}についてのみ語ろうとしたものはたいがい失敗しており、むしろ自己の環境について、環境と自己との交互作用について述べようとしたのが成功している。

これは日記と自叙伝との種類の区別を暗示するものでなければならぬ。両者はよく一緒に語られるけれども、実はその性質を異にしたものである。日記が抒情詩^⑧と同じ線にあつて反対の方向にある、いわゆる^⑨自照の文学に属するとすれば、自叙伝は叙事詩と同じ線の上にある歴史文学に属している。一方を主観的性質の文学というならば、他方は客観的性質の文学といわれよう。日記

の性質が断片的であれば、自叙伝の性質は構成的である。

E であることを要求されているところに自叙伝の困難がある。なぜなら構成的手法または技巧はたいの場合自己の思想や感情のまともな表現を害うものであるから。歴史的であり、したがってすぐれた「歴史的意識」が必要とされていると共に、それがほかならぬ「自己」の歴史であるべきところに、自叙伝の困難がある。それでイギリス史についての大作をなしたヒュームも自伝については最も簡単に記す道を選んだのである。(中略)

最後にただひとこと。日記と自叙伝に対する興味が他人の私事の秘密をのぞこうという卑しい心、成功主義的または英雄主義的の安価な感激を求むる心にもとづかないにしても、それが心理的主観的なものに対する偏愛、客観的現実と社会的実践からの逃避、主観主義的、個人主義的な道学者趣味、等々のものにしらず結び付いていることの多いのを指摘しておくことが必要であろう。日記や自叙伝に対する興味は「文化人」のものであるということのうちにすでに或る危険が含まれている。

(三木清「日記と自叙伝」による)

(注1) アミエル、スイスの哲学者、詩人、批評家(一八二一—一八八一)。

(注2) ヒューム、イギリスの哲学者(一七一—一七七六)。

〔問一〕問七については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問八・問九については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B C Dに入る語句として、最も適當なものをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を

二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-------|---|------|
| 1 | あるいは | 2 | しかし | 3 | したがって | 4 | ところで |
|---|------|---|-----|---|-------|---|------|

問二 傍線①「徒らに」とあるが、その意味として最も適當なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-----|---|------|---|-------|
| 1 | むりやりに | 2 | むだに | 3 | めったに | 4 | ふまじめに |
|---|-------|---|-----|---|------|---|-------|

問三 傍線②「そこにおいてほりアリズムの要求されるところはないのである」とあるが、その理由として最も適當なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

1 日記や自叙伝は、醜聞として暴かれないように秘密や告白、自己誇示を避け、人間の生活を淡々と描くことが要求されるから。

2 日記や自叙伝は、秘密や告白、自己誇示も含めて、人間らしい生活や運命について現実に書くことが要求されるから。

3 日記や自叙伝は、自己の現実をしっかり見つめながら、自己の隠された内面の真実、現実の姿を表わすことが要求されるから。

4 日記や自叙伝は、自己誇示、秘密や告白といった内面の自己暴露ではなく、生活や人生を現実に表すことが要求されるから。

問四 傍線③「詩的であろうとすると、装飾的になったり、センチメンタリズムに陥ったりし易いものだ」とあるが、その説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 文章を比喩的に飾り、自分の感情や才能を誇示しようとする事
- 2 言葉で現実を華美に飾り、自分に甘えて感傷的な表現に浸る事
- 3 現実の自分を美化して、自分の感情を詩的に飾り立てる事
- 4 甘ったるい感傷的な表現をとらず、自分の感情に正直に表現する事

問五 傍線⑧「抒情詩と同じ線にあつて反対の方向にある」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 日記は抒情詩と同様に主観的性質をもつが、抒情詩のように詩的に感情を表現しないから。
- 2 日記は抒情詩と同様に個人の内面を表すが、抒情詩のように繊細な感情を表現しないから。
- 3 日記は抒情詩と同様に生の断片性に規定されているが、抒情詩のように生の主観的性質をもっていないから。
- 4 日記は抒情詩と同様にリアリズムを要求するが、抒情詩のようにセンチメンタリズムに陥ることはないから。

問六 傍線⑨「自照の文学」とあるが、「自照文学」を例示するものとして最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 歴史文学
- 2 大衆文学
- 3 自叙伝
- 4 日記

問七 傍線⑪「或る危険」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「文化人」が、歴史的意識を持つことができずに、英雄主義的感動を求めようとしている危うさ
- 2 「文化人」が、客観的現実と社会的実践に向かわず、心理的主観的なものに関心を向けている危うさ
- 3 「文化人」が、社会を変革することを回避し、個人主義的な道学者趣味にふけっている危うさ
- 4 「文化人」が、客観的現実を見極めようとせず、心理的主観的な趣味に没頭している危うさ

問八 Eに入る語句を、本文中から漢字三字で抜き出しなさい。

問九 傍線④⑤⑥⑦⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。